小説によみがえる古典

――小説『新・紫式部日記』はこうして生まれた――

作家　夏　山　かほる

1　はじめに

皆様、はじめまして。『新・紫式部日記』という小説でデビューした夏山かほるです。『新・紫式部日記』は、皆様ご存知の平安時代の大作家、紫式部、作中では藤式部が権力者に仕え、どんな思いを持って源氏物語を作り続けていったのかを描いた一代記です。

本作は、日本経済新聞が主催する令和元年度第 11 回日経小説大賞を受賞しました。この賞は、プロ作家デビューできる賞で、最終選考委員は辻原登先生、高樹のぶ子先生、伊集院静先生といった有名作家の方々がなさっています。先生方に選んでいただいて、こういう装幀の本を作っていただきました。ブックデザインは著名な装幀家の芦澤泰偉さんで、新人作家というのに大変名誉なことです。表紙に描かれた紫式部は石山寺所蔵の土佐光起筆紫式部図です。有名な絵

なのでご存知の方も多いと思いますが、この絵を使わせていただくというのも、芦澤先生のアイディアです。今回、石山寺様から使用のご許可をいただきました。

本作は、いわゆる本家日記文学の紫式部日記の小説化ではありません。紫式部の宮中で生きた日々を描いていますので、紫式部の日々という意味で『新・紫式部日記』とタイトルを付けました。原典と創作が一体となった吉川英治の『新・平家物語』のように、オリジナル部分も多いので、それに倣って「新」を付けてみました。作者的には紫式部日記の続編と間違えられないように、さらに中黒の点をつけたところがポイントです。表紙では、芦澤さんはそれを単に点ではなくて梅のマークのデザインにあしらってくださいました。発売が２月末だったので、ちょうど梅の季節ということで心配りをしていただいたかなと思います。美しい装幀ですので、是非、書店等で手に取ってご覧になっていただきたいと思います。そして、帯の表には、本文の一節「あなたは使い捨てられてはなりませぬ。私のように」が書かれています。これは日経の編集さん一押しの心に残る一節です。さて、この一節を誰が言ったのかは、本をぜひお読みいただきたいと思います。

紫式部が石山寺で源氏物語須磨巻を書き始めたという伝説がありますが、本作でも石山寺は先ほどの一節が出てくる重要な場面の舞台となっています。出版されると、Twitter などで平安ファンからの反響が大きくて、改めて紫式部の偉大さを感じました。石山寺公式キャラクターに石山多宝くんというのがあるのですが、そのキャラクターからも Twitter をフォローしていただき、

今回の講演会も宣伝していただきました。おかげさまで3,000を超えるアクセスがあり、それだけみなさんの古典に対する関心が深いということなのだと思っています。

2　デビューまで

さて、デビューに至るまでの道筋をお話しようと思います。私は本を読んで、想像を膨らませるのが好きな子どもだったこともあり、自然な流れで文学を学びたいと福岡女子大学文学部国文学科に入学しました。次いで九州大学大学院文学研究科と進み、そこで源氏物語注釈書の研究などを行いました。大学院では本日司会の福田智子先生が先輩で、本日参加される竹田先生にお会いしたのもその頃です。

もともと想像好きな自分としては、作品を読んでこの人物の気持ちはこうだったのかなと解釈する方に興味があったのですが、当時の文学研究はもうそういう切り口ではありませんでした。もっと資料に即して、分析的に傾向を出していく手法でしたが、当時の分析というのは基本手作業で用例をカードにして調べるというのがまだまだ主流で、今のようにビッグデータを駆使することは出来ませんでした。それもあって自分に合ったテーマでなかなか成果を出せませんでした。

だからといって、その頃は小説家になるとは想像もしていませんでした。そんなこんなで、博士後期課程の単位を取得し、大学院を満期退学して、研究からも離れて、結婚したり引っ越しした

りと何年か過ごしました。少し余裕ができた頃、平安文学の知識を生かして何かできないか、と考えました。平安の知識というのは何にでも使えるというわけではないので、平安時代を舞台にした小説を書いて生かしてみようと思い立ちました。

それが今から８年～９年ぐらい前の話です。せっかくフィクションを書くので、研究ではできないことをやってみようと思いました。私は源氏物語を研究していましたので、最初は源氏物語のモチーフから着想を得た、創作色の強い作品を書いていました。〇〇天皇の時代と規定するのではなくて、「ある帝の御代に、ある姫君がいて、ある右大臣がいて」という設定です。

その頃に最初に書いた短編が某賞の二次選考を通過したので、「これは結構いけるんじゃないかな」とデビューを楽観視していたのですが、その後、伸び悩みに直面しました。平安時代を題材にしたものというのは、歴史小説に応募する人の中で少ないようなので、一次とか二次は通過するのですが、そこから先になかなか行けませんでした。「どういうところがいけないのかな？」と考えて、自分でいろいろ改訂をやらなきゃいけないのですが、その時思ったのは創作というのは孤独な作業だなということです。大学での研究は、ゼミの発表とか論文の投稿をすれば、議論や査読で「ここが足りない」とか「ここの部分はもう少し膨らましてほしい」と改善提案をいただけます。しかし、小説新人賞は投稿しても講評や選評がもらえるのは、最終候補に残ったり、かなり上の選考まで進んだりした、ほんの一部の作品だけという場合が多いのです。ですから、自分の作品を客観的に見て、どこをどう

改善するのかというのが一番の困難でした。だからといって、安易に小説教室に行くのをお勧めしているわけではありません。本気の推敲は自分にしかできないからです。

そんな中、転機がやってきました。試行錯誤を続け、もうこれ以上推敲できないという渾身作で、2017年、平成29年3月に「松本清張賞の最終候補になりました」とご連絡をいただきました。そして、文藝春秋の方が私の住んでいるところまで会いに来られました。「選考会のある日は、受賞したら、決まった人は来られる人はそのまま記者会見に出てください」というのが当日の予定についての連絡でした。選考会の前に、文藝春秋の方がいらしたこともあり、「かなり有望なのかな」と期待して上京し、連絡を待ったのですが、あえなく落選の憂き目を見ました。

天国から地獄に落とされた形で、この時が一番のスランプで、もう筆を折ろうか、それとも書く時代を変えようかと考えました。平安時代の小説で新人賞デビューは難しいかなと思ったのです。でも、大学院で近世文学の科目も取ったのですが、本格的に学んでいない時代を小説に書くのはなかなか難しいと思いました。やはり自分が学んだ平安時代の作品を書きたいという思いが強かったのです。

では、新人賞を受賞するにはどうしたらよいか、改めて真剣に考えました。まず、ヒット作に学ぼうと思いました。ちょうど、2016年のNHK大河ドラマ「真田丸」がヒットしたばかりでした。真田信繁（幸村）は、私の住んでいる長野県の英雄ということで、地元では社会現象になるほどの大盛り上がりでした。それを目の

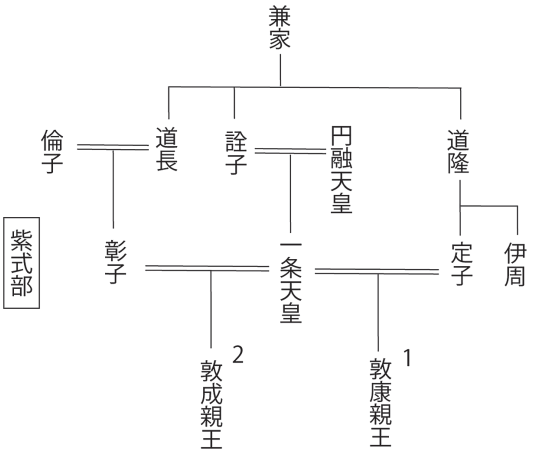
当たりにして、今の時代は皆が知っている主人公が活躍する物語が好まれるんだなと思いました。そこで、平安時代でみんなが知っている人物といえば紫式部です。スライドに日本文学史のスーパースターと書いていますが、みなさん、平安といえば紫式部とおっしゃる。しかし、私のような新人が、こんな著名な人物を新人賞の作品に書くのはどうかとも思いました。特に私のように源氏物語を研究対象としていた身としては、おこがましいんじゃないかという思いが強くありました。それでもここで紫式部の力を借りないとデビューができないと思い、紫式部を主人公に決めました。

3　学術研究を小説に生かす

次にどんな筋立てにするかです。小説や映画のヒット作にはドラマチックな史実、ドラマ性や謎、ミステリーといったものが含まれています。紫式部が生きた平安期一条朝において注目すべき政治トピックと言えば、一条天皇の皇子である敦康親王と敦成親王のどちらが皇太子になるかという立太子争いです。もう一つ謎というのは日本文学史最大のミステリー、なぜ源氏物語が書かれたのか、どうして流行したのか、という源氏物語誕生の謎です。

これらに注目して、そこに学術研究の成果を生かしてみようと思いました。一条天皇には皇后定子が生んだ第一皇子の敦康親王と中宮彰子が生んだ第二皇子の敦成親王がいましたが、次の皇太子をどちらにするかという悩みがありました。スライドの系図を

ご覧になれば分かりますが、敦康親王の母の定子に清少納言が、敦成親王の母の彰子に紫式部が、それぞれ仕え反対陣営にあったというのは、皆さんご存知のとおりです。

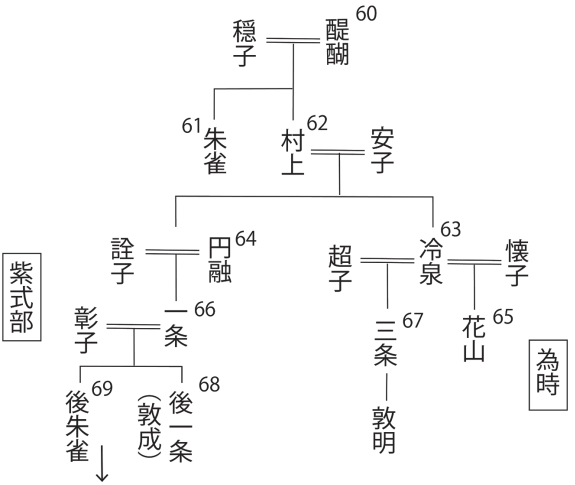


敦康親王と敦成親王は、どちらも后を母に持つ皇子なのですが、そういう后達が産んだ子の中で、第一皇子が東宮つまり皇太子にならなかった先例は基本的にないというのを、歴史学の倉本一宏さんの書籍で知りました。以前から定子の実家の伊周方、つまり中関白家方が、結局皇太子を立てられなくて没落していったというのは知っていましたが、先例主義の平安朝で第一皇子が立太子するという原則をひっくり返して、第二皇子に東宮位を持って行くというのは、いくら道長とはいえ、すごい力技です。これは宮中に激震が走ったのではないかと思いました。史学研究の知見を

取り入れてこの騒動を描けば、面白い小説になると考えた次第です。

倉本さんの書籍には、もう一つの皇統争いのとき前代の皇統がおとしめられるという現象があるということも書かれていて、それも興味を引かれました。これが「なぜ源氏物語は書かれたのか？」という謎につながっていきます。源氏物語には、主人公の光源氏が、父桐壺帝の妻、藤壺の宮と密通をして、不倫の子をもうけるというテーマが出てきます。よく考えてみると、非常に恐れ多いテーマなのですが、それがおとがめを受けることもなく、宮中のみんなが読んでいる。さらに帝も読んでいるというのは、公認の話題であるということです。

スライドの皇統図をご覧下さい。この図の中に一つだけ、源氏物語に出てくる帝の名があります。図の右下のあたりに、第63代冷泉天皇という人がいます。先ほどの倉本さんの著書に、古記録や歴史物語の中で冷泉天皇をおとしめる記述があるが、それは言ってみればうそ偽りで、冷泉皇統をおとしめるために、そういうふうに書かれたのではないかという見解がありました。私は、源氏物語にもそういった政治的な役割があったのではないかと考えました。



系図にあるように、冷泉天皇の子どもは65代花山天皇で、冷泉花山の皇統ということになります。同じ冷泉皇統につながる67代三条天皇がいて、その皇子が敦明親王です。一時、敦明親王は一条天皇の皇太子だったのですが、道長はその位を辞させて、自分の孫の敦成親王、その弟の敦良親王を皇太子にしたいと考えていました。だから、早く位を降りてもらうために、冷泉皇統であるところの冷泉の御名を汚そうと、源氏物語の中で不義の子である帝の名に使わせたのではないか？そういう解釈がなんとなく浮かんできました。この源氏物語が書かれた政治的背景の解釈を小説に盛り込んでみたら、面白いのではないかと思いました。

4　史実と創作の間

ただ、史実と創作の間をどのように埋めていくのかという問題が残りました。紫式部の立場は彰子付きの女房なので、史実通りだと立太子争いについては傍観者に過ぎず、直接深く関わることはできません。紫式部が、この政治的な騒動に自らのこととして関わっていくためには、どうしてもある仕掛けが必要になってきます。そこである仕掛け、ある小説ならではの取り組みを考えました。それがどういうものかは、ぜひ『新・紫式部日記』をお読みいただきたいなと思います。

平安文学と言えば、紫式部と並んで清少納言の名前が必ず出てきます。『新・紫式部日記』ではない別の平安作品の構想を一般の方にお話したときに、「清少納言は出てこないんですか？」とか、「二人は会っていたりしないのですか？」とか聞かれました。一般の方の関心はやはり二人の関係に行くのだなと思いました。紫式部と清少納言は、反対陣営にいましたが、10年ぐらい年代がずれて宮中にいますので、直接的に後宮で会って反対陣営同士で反目し合ったということはないというのが、従来の認識でした。ごく最近、後宮以外の所で会っていたかもしれないという意見も出てきましたが、二人は直接会っていないという理解が通説です。

しかし、二人に面識はないで済ますと、小説として面白くありません。そこで思い出したのが竹田先生、福田先生達が2000年に発表された「和歌データからの類似歌発見」というご研究です[1)]。これは、紫式部の曾祖父と清少納言の祖父が、源氏物語に

も何度も登場する和歌を介して関わりがあった事を発見されたもので、当時、朝日新聞でも大きく取り上げられました[2)]。そのご研究を思い出して、物語の冒頭部分とエンディング部分で、入口と出口をつないでいく役割を持たせることにしました。その場面の面白みとして、曾祖父たちの話を盛り込んで、冒頭とエンディングを交差させる、小説の構造としての効果も得られたのではないかと思います。

一般の方からの何気ない一言、「紫式部と清少納言は、二人で会っていたりしないんですか？」という素直な疑問をきっかけとして、竹田先生、福田先生達の研究成果を小説に生かして、日経小説大賞を受賞することが出来ました。本当にありがたいと思います。以下のような選考委員の方からの評価をいただきました。これは授賞式のときの選評ではなくて、非公開で行われた授賞式座談会でいただいた言葉です。辻原登先生からは、「この小説を読んで、やっと源氏物語が身近なものになりましたよ」と言っていただきました。高樹のぶ子先生からは、「小説として書こうとした姿勢が、本当に素晴らしい」という過分な評価をいただきました。

では、ここで少し本作の本文をご紹介したいと思います。これは上記座談会イベントで朗読をした部分になります。日経の編集の方としては作品を紹介するいい箇所だということです。

「この度、そなたを飛香舎（ひぎょうしゃ）の女房として中宮に奉（たてまつ）ることになった」藤式部はにわかに何の

ことをいわれているのか合点がいかなかった。「飛香舎に奉るとおっしゃいますと……？」「中宮がそなたを物語の女房として、正式にお側に召したいと仰せなのだ」かたわらから倫子（りんし）が声を弾ませてささやきかけた。

「ご出世ですよ、藤式部。何よりではありませぬか」「女房として出仕する女子（おみなご）はめずらしくないが、文の才を以て宮中に上がるとは前代未聞なり。まこと、後の世の例（ためし）にもなりぬべきことだ」（本文 71 頁）

（中略）

「喜ぶのは結構だが、先に話したごとく、そなたの物語には宮中での役目がある。それを忘れてはいまいな」（同 73 頁）

と続いていくわけです。新聞広告はここを取られたようですが、宮中での役割というのが先ほど話した政治的な役割を担わそうとする道長の思惑が透けているようなところです。

紫式部の曾祖父と清少納言の祖父が交わした和歌についての竹田先生、福田先生達の研究成果が現れている部分は以下の通りです。

「人を思ふ心は雁にあらねども　雲居にのみもなきわたるかな」清原深養父

これは清少納言の祖父の歌です。この歌が先に詠まれていまして、それを次の歌に生まれ変わらせたのが、紫式部の曾祖父藤原

兼輔です。

「人の親の心は闇にあらねども　子を思ふ道に惑ひぬるかな」
藤原兼輔

この歌は、子故（こゆえ）の闇という言葉とともに、源氏物語にも何度も出てくる平安朝で非常に有名な歌で、本作でも象徴のような役割を果たし、内容にも大きく関わっています。

5　終わりに

最後に、古典研究と歴史小説の創作がどのようにお互いに作用を及ぼすのか、種になっていくのかということについてです。古典研究から得られる成果、研究論文や新解釈は、ずっと積み上げられながら進んでいくものです。そのような成果が、研究の世界にとどまらず、新書や一般書籍の形になって、研究外の世界の普通の読者に届けば、創作する側に新しい創作のきっかけやヒントを与えてくれると思います。一方で、小説表現の世界というのは、論文として論証できない可能性、史実と史実の間（あわい）、それらを提示することができる自由さがあります。その論証できない部分を、想像力を駆使して描くのが小説執筆の楽しみです。そしてその時に、新しい研究成果、それまで知られてこなかった研究成果に基づいて再構成すると、物語に深みが加わって、新しい時代小説、歴史小説が生まれてくる可能性があると思っています。

大学の文学部で古典文学を学ぶということは、こうした小説執筆の基礎教養としてとても勉強になります。私は文学部で学んでいなかったら、小説家にはなっていなかったと思います。私は大変遠回りをして小説家になりましたが、最初から小説家になるつもりで、文学部で文学や古典を学んでみると、いつの時代にも人の心を動かす普遍的な何かがあるということが分かってくると思います。それを直接の作品、直接の原典から、真正面から深く学ぶことができるというのも、文学部で学ぶという意義なのではないかと、小説家になってしみじみと思っています。

以上が本日の私の講演です。ありがとうございました。

参考文献

1) 竹田正幸・福田智子・南里一郎・山崎真由美・玉利公一（2000）和歌データからの類似歌発見. 統計数理, 48（2), 289 – 310.

2) 「紫式部と清少納言の意外な因縁をコンピューターが発見」朝日新聞, 2001 年 5 月 26 日夕刊